

園長だより NO76

あと数日で4月が終わります。新入園児を迎えもうすぐ1カ月が経ちます。子どもだけでなく大人にとっても新しい環境下での生活は気疲れもあり、体力的にもしんどいことがあったことと思います。数日後はゴールデンウィークになります。ゆっくりと時を過ごし心と身体のケアができることを願っています。

「慣らし保育」

保育園はもとより子ども達が過ごす施設では新入園児の慣らし保育が行われることが大半です。新しい環境に慣れるという位置づけで少しずつ生活体験を積んでいきます。

慣れるとは、調べてみるとその状態に長く置かれたり、たびたび経験したりして、違和感がなくなる。又馴れる(慣れる)とは、その人に対して、違和感がなくなる。その人に親しみを持つようになる。という意味があります。

私は日常、使っている慣らし保育という言葉に違和感があります。慣れていくとは大人の都合のような感じがする。子ども達は自ら新しい環境に主体的に関わっているように思えるからです。

ぐずったり、泣いたり、時には拒否したり、はじめて出会う人、環境に自分の感情をぶつける。じっと泣くのを我慢する。笑っているけど心からの微笑ではなかったり、新しい環境での生活を通じて内面に湧き起こった感情を



2022.4.27

わかる・わかりあうことから

愛着の形成へ

保育業界ではアタッチメントと言われ愛着の形成の重要性が広く浸透しています。アタッチメントとは子どもが不安な時や感情が崩れたときに特定の大人につき、こころの平穏を取りもどし、もう大丈夫と安心感に浸ることを意味しています。

今、現在、保育の中ではアタッチメントという行為が日常、よく見られています。

子ども達の崩れた感情の立て直しや自分の感情に共感してくれる大人の存在に出会い、寄り添う大人を好意的に子ども達は感じるようになっていきます。

自分のことをわかってくれる。自分は大切にされている。泣いていた自分が笑顔になった。(自己の理解)など子どもながらに心を育てているのです。

日々、当たり前のアタッチメントが子どもの理解に繋がり、更には大人とわかりあえることに繋がっていきます。

子どもにかかわる大人(保育士)は子どもが困ったとき、不安になったときの安全な避難場所であり、安心できる基地(ベース)であることが望まれます。

1年の中で一番子どもの感情の起伏が激しい時期、大人(保育士)といると「もう大丈夫」と思える子ども達の感情、思いを育ませてあげることが保育の柱の一つでもあります。

アタッチメントから

自己発見の連続

子どもの安心基地ができると次第に基地をベースにしながらいろいろな探索が始まる。安心基地(保育士)を連れまわしあちら、こちらと探索もはじまる。

泣いて、笑って、怒って、感情を豊かに表出する。家庭で過ごすだけでは体験できない感覚の感情も体験する。

自分を発見し新たな自分にあえることが安心できる環境下では必須の課題である。

入園した子ども達ならすぐにその課題はクリアできます。何かあったときに避難できる安全場所(保育士)、心が穏やかになれる安心基地(保育士)があることが子どもの世界を広げていきます。

今は子どもと共にわかりあえる関係性を築いている最中、だから泣きたいときは我慢せずに泣く事、きっとそばにいる大人がわかってあげる、もう大丈夫と寄り添ってあげます。

(園長 廣部 信隆)

会ってから日の浅い大人にぶつけている。

職員にはこの時期、感謝しかない、いろいろな表情をみせ、いろいろな感情をぶつけられても実に穏やかに対応しようと努めている。その子の心情をわかろうと努め、寄り添い、生活を共にしている。

新入園児の子ども達の安定と共に在園の子ども達の生活も進級前と変わりなく過ごすために知恵をしぼり保育に反映させている。

在園児童でも新し環境の変化に動じて心の起伏が生じ安定を欠いてしまう子もいる。

どちらの子ども達にも適正な働きかけを日々の保育を振りかえり次の日に繋げている。

そんな保育士を見ていると、「慣らし保育」という期間は子ども、大人にとっては「わかりあう期間」「関係を育む期間」と置き換えられるように思える。

子どもにとっては「今までにない、感情の体験の期間」が加わるのかもしれない。

「慣らし保育」という言葉に違和感があると感じるのは私だけかもしれないが 私は入園、進級時期を「わかり合い保育」の期間と思っている。

慣れたり、慣らしたりというものでなく子どもとそれを取り巻く大人がいろいろなことをわかっていくことが生活のベースにあるように思っています。

